

小婦方遺跡

—第3次発掘調査報告書—

2022

姫路市教育委員会

序

姫路市には現在、約1,200箇所の遺跡が知られています。本市では、これらの遺跡をはじめとする埋蔵文化財を貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため、遺跡の発掘調査、出土品等の整理・調査研究及び展示等を行っています。

市の中央部を流れる市川東岸には国指定史跡である壇場山古墳、山之越古墳、播磨国分寺跡等があり、古代播磨国に関わる歴史遺産が数多く残されています。このたび実施した花田町加納原田に所在する小婦方遺跡の発掘調査では、弥生時代から鎌倉時代にかけての多数の遺構や遺物が見つかりました。弥生時代の区画溝、古墳時代の韓式系土器、平安時代の集落跡など地域の歴史を考える上で注目すべき調査成果が得られています。

ここに調査成果を報告し、地域の歴史解明の進展に資する所存であります。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和4年(2022年)3月

姫路市教育委員会

教育長 西田 耕太郎

例言・凡例

1. 本書は姫路市花田町加納原田字小畑方 883 番、884 番 1・2、885 番、896 番 3、887 番 1、897 番の一部、宇北條 873 番 3 で実施した小畑方遺跡第 3 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は店舗建設工事に先立って、令和 2 年 6 月 25 日から同年 10 月 3 日の期間に実施し、出土品整理作業及び報告書の作成は令和 3 年度に実施した。
3. 発掘調査はミツヤ設計株式会社の委託を受けて姫路市が実施し、現地調査および出土品整理作業、発掘調査報告書の作成は姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センターが担当した。
4. 発掘調査および出土品整理作業、発掘調査報告書の作成・刊行に係る経費はミツヤ設計株式会社が負担した。
5. 遺構名の表記は、掘立柱建物跡 (SB)、溝 (SD)、柱穴 (SP)、土坑 (SK)、不明 (SX) とし、検出順に 1 番から通し番号を付している。
6. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は東京湾平均海水準 (T.P) を使用した。
7. 土層注記に用いた色調は『新版 標準土色帳』(1999 年度版) に準拠している。
8. 本書で用いる土器類の分類名・編年および年代観は次の文献によっている。
弥生土器：長友朋子・田中元浩 2007 「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年―播磨編―』、大手前大学史学研究所
韓式土器：韓式系土器研究会 1987 『韓式系土器研究 I』
在地土器：姫路市教育委員会 2018 『姫路市埋蔵文化財センター報告第 56 集 村東遺跡』
須 恵 器：兵庫県教育委員会 1995 『兵庫県文化財調査報告第 139 冊 相生市緑ヶ丘窯址群 II』
9. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
10. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、加納原田自治会の皆様より御協力を賜った。深く感謝の意を表します。

目次

第 I 章	調査に至る経緯と経過	1
第 1 節	調査に至る経緯と体制	1
第 2 節	調査の経過	1
第 II 章	遺跡の立地と歴史的環境	2
第 1 節	遺跡の立地と歴史的環境	2
第 2 節	既往の調査	2
第 III 章	調査の結果	4
第 1 節	調査区の基本層序	4
第 2 節	遺構	4
第 3 節	遺物	20
第 IV 章	総括	23
	写真図版	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と体制

姫路市花田町加納原田字小婦方883番、884番1・2、885番、896番3、887番1、897番の一部、字北條873番3において店舗建設工事が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である小婦方遺跡（兵庫県遺跡番号：020936）に一部該当している。

事業者より令和元年（2019年）6月18日付けで文化財保護法第93条に基づき届出があった。届出の内容に基づき令和元年8月2日に事業地内の埋蔵文化財の有無を確認するために試掘・確認調査（遺跡調査番号：20190208）を実施した。調査の結果、遺構・遺物が確認されたため、工事により影響を受ける範囲を対象として、令和元年8月16日付けで記録保存の指示・勧告を行った。指示・勧告内容に基づき令和2年（2020年）6月1日付けで姫路市とミツヤ設計株式会社とで委託契約を締結し、本発掘調査を実施した（遺跡調査番号：20200115）。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

姫路市教育委員会

教育長 西田耕太郎（令和3年4月1日～） 文化財課

松田克彦（～令和3年3月31日）

教育次長 峯野仁志（令和3年4月1日～）

岡本 裕（～令和3年3月31日）

生涯学習部

部長 福永安洋

（令和3年7月1日より文化財課長兼務）

課長 村田 泉（令和3年4月1日～6月30日）

大谷輝彦（～令和3年3月31日）

中川 猛（令和3年4月1日～）

関 梓

埋蔵文化財センター

館長 大谷輝彦（令和3年4月1日～）

松本 智（～令和3年3月31日）

課長補佐 岡崎政俊

森 恒裕

多田暢久（令和3年4月1日～）

技術主任 中川 猛（～令和3年3月31日）

技師補 河本愛輝（令和3年4月1日～）

なお、発掘調査の実施にあたっては、有限会社松浦興業（現 matsura 株式会社）市田英介の支援を得た。

第2節 調査の経過

調査対象面積は699㎡である。令和2年（2020年）6月25日より調査を開始した。耕土・造成土等を重機により除去し、調査区壁面の精査、遺構の検出および検出した遺構の発掘を人力で実施した。調査の進捗に伴い適宜、記録のための写真撮影、実測図の作成を行った。

調査は敷地南側から順次実施し、9月5日に南側と北側の全景写真を撮影した。引き続き、東側の調査を行い、9月24日に全景写真を撮影した。その後、既存水路にかかる部分を調査し、10月3日に現地での調査を完了した。遺物はコンテナ（L590mm×W386mm×H106mm）14箱分が出土した。令和3年度に整理作業を行い、本報告書の刊行をもって全ての事業を終了した。



図2 今回の調査区と既往の調査位置

第二章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

小幡方遺跡は、兵庫県姫路市花田町加納原田字小幡方に所在する。遺跡は姫路市域を南北に貫く市川の左岸にある河岸段丘上、標高約18mに立地する。調査地の南東には、兵庫県下第2位の規模を誇る壇場山古墳や、山之越古墳、櫛之堂古墳、林堂東塚古墳が存在する。また、国分寺台地遺跡からは初期須恵器や韓式系土器が出土している。奈良時代に入ると播磨国分寺や播磨国分尼寺が建立され、室町時代には御着城が築城されている。

遺跡北側に位置する庄山山塊南麓には石積山1号・2号墳、補へら南麓古墳、トンノク谷1・2号墳、宝塚古墳、トオツカ古墳等の古墳が点在する。そして、こうした古墳群の存在を背景とするかのように、小川廃寺、上原田廃寺、豊国廃寺といった複数の古代寺院が建立された。また、近年の調査で、宮ノ浦遺跡では、飾磨郡衙の出先機関の可能性のある7世紀から10世紀にかけての掘立柱建物が発見されるとともに、暗文土師器や上原田式軒丸瓦などが出土している。その宮ノ浦遺跡に東側に近接する上原田遺跡では、井戸や和同開珎を収めた地鎮遺構が発見され、附近一帯に官衙に関連した遺構が存在していると考えられる。

以上のように、調査地周辺は、姫路市域はもとより播磨地域の歴史を語るうえで重要な遺跡が集中しているといえる。

第2節 既往の調査

小幡方遺跡においては、これまで2回の調査を行っている。今回の調査地の北東において、平成20年（2008年）に実施した第1次調査では、土坑と溝を検出した（図2）。このうち、調査区南部で検出したSK02から韓式系土器・初期須恵器等が出土した（参考文献1）。工事中の立会調査のため報告書は刊行しなかったが、今回の調査においても韓式系土器が出土しており、調査地が隣接することから一連の遺構群として理解できる。そこで、SK02の出土物について報告する（図5）。

1～4は高杯である。このうち、1と2は同一個体である。3は脚部との接合部分で剥落している。5～8は小型の甕である。5は丸底を呈し、支脚の当たりが3箇所みえる。7は平底を有することが最大の特徴である。外面調整はハケメによるが、器形は韓式系土器の平底鉢に系譜を求められるもので、「土師器化」した結果と考えられる（参考文献2）。9は把手で、外面側から挿入されており、器壁に縄文タタキが残る。10・11と同一個体の可能性がある。10・11は甕で、いずれも外面に縦方向の縄文タタキを施す。10は口縁部直下と残存部下端付近に強いヨコナデを施す。11の底部の蒸気孔は楕円形の孔を中心に、周囲に7～8個の円形孔が配置されていたとみられる。12は長胴甕で、胴部外面には縄文タタキがみえる。13は布留式の甕である。

なお、11・13については、平成23年（2011年）に畑田遺跡（姫路市飯田）や市之郷遺跡（姫路市市之郷）の出土土器36点とともに蛍光X線分析法と実体顕微鏡観察による胎土分析を実施している（参考文献3）。分析は、韓式系土器と伴出した在地の土師器を対象とした。分析の結果、両者の間には胎土中に含有する鉱物の差はなく、ほとんどの土器が出土した遺跡およびその周辺地域で製作された可能性が高いという結果が得られている。



1. 小幡方遺跡
2. 上原田廃寺
3. 宮ノ浦遺跡
4. 上原田遺跡
5. 豊国廃寺
6. 小川廃寺
7. 長存遺跡
8. 高木遺跡
9. 石積山1号墳
10. 石積山2号墳
11. 補へら南麓古墳
12. トンノク谷1号墳
13. トンノク谷2号墳
14. 宝塚古墳
15. トオツカ古墳
16. 小寺塚山古墳
17. 播磨国分尼寺跡
18. 播磨国分寺跡
19. 抄見神社遺跡
20. 真福寺西方遺跡
21. 山之越古墳
22. 国分寺遺跡
23. 壇場山古墳
24. 播磨国分寺跡
25. 国分寺台地遺跡
26. 林堂東塚古墳
27. 御着城跡
28. 八重鉾山古墳
29. 飯元山1号墳
30. 飯元山2号墳

図3 調査地周辺の遺跡



図4 1次調査SK02遺物出土状況(北から)

1次 SK02 土器群

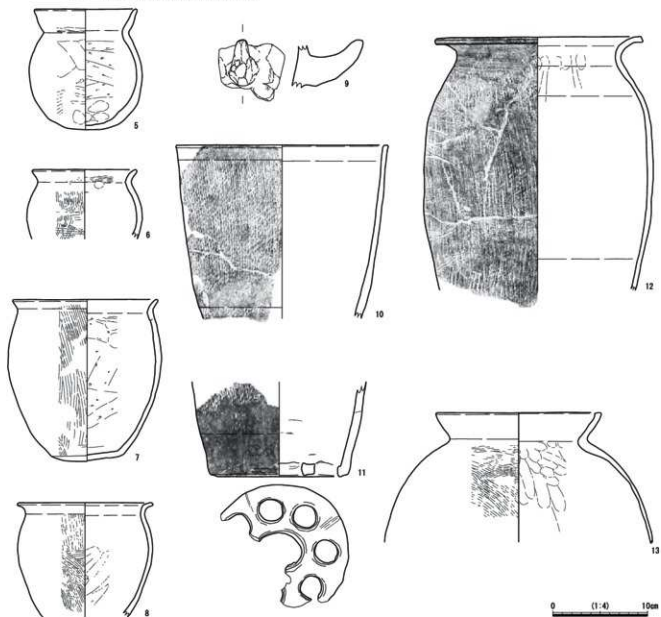
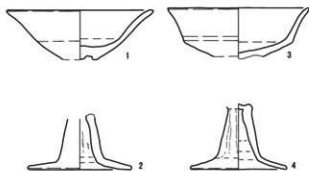


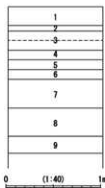
図5 1次調査遺物実測図

第三章 調査の結果

第1節 調査区の基本層序

調査対象は、基礎等の工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲（以下、調査区と表記）とし、計48か所の調査区を設定し、調査を実施した。

調査区の基本層序は耕土（1層）、床土（2層）、褐色シルト層から黒褐色シルト～粘土層（3～6層）を経て、明黄褐色の地山（7層以下）に至る。遺構検出は地山上面で行った。地山の標高は調査区北端で16.9m、南端で16.5mを測り、地形は緩やかに南に向かって傾斜している。



1. 10YR3/1 黒褐色中～粗砂混じりシルト
2. 7.5YR6/4 にぶい褐色シルト
3. 10YR6/1 褐色細砂～中砂混じりシルト
10YR5/1 褐色細砂混じりシルト
4. 7.5YR2 灰オリブ色細砂混じりシルト
5. 5YR2 灰オリブ色細～中砂混じりシルト
6. 2.5Y3/2 黒褐色細～中砂混じりシルト～粘土
7. 10YR7/6 明黄褐色シルト～粘土
8. 10YR6/6 明黄褐色粘土
9. 2.5YR2 灰黄中～粗砂混じりシルト

図6 基本層序図

第2節 遺構

調査では、弥生時代後期、古墳時代、平安時代後期から鎌倉時代の各時期にわたる遺構・遺物を確認した。検出した遺構は掘立柱建物跡4棟、溝35条、土坑57基、柱穴210基である。掘立柱建物跡（SB1～4）は、平安時代から鎌倉時代にかけてのもので、全て調査区東側の44区で検出した。溝は弥生時代、古墳時代、中世の各時期のものを検出した。調査区の制約から全容が判明するものは限られる。弥生時代の溝は規模の大きいものと小さいものの2者がある。古墳時代の溝は、第1次調査で検出した溝と一連の可能性が高く、北西から南東にかけて検出した。中世の溝は、現地でも確認できる地割に沿っている。土坑は各時期のものを検出した。特に44区で検出した平安時代以前の大型の土坑群は、性格は不明であるものの、埋土の状況は共通している。柱穴内からは埋納された須恵器壺や、類例の少ない須恵器容器、鉄鏃等が出土している。各遺構の詳細は一覧に整理した（表1～5）。以下、主要な遺構について述べる。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、調査区南部を中心に広がり溝・土坑等を検出した。

SD20（図14）は1、9～11区で検出した西から東へ直線的に延びる溝で、延長約20m、幅2m、深さ68cmを測る。溝の肩は角度をもって掘り込まれ、埋土から2時期の変遷が確認できる。溝最下部は炭化物を多く含む粘質の強いシルトである。図示していないが下層からは弥生土器片が出土し、弥生時代後期に位置づけられる。なお、11区以東の12、13区でも南北方向の溝SD60を確認できるが、溝の規模が小さく一連となるかどうか判断できない。

SD49（図14）は10区内で北から東にL字に屈曲する溝で、延長約35.5cm、幅1.1m、深さ42cmを測る。南はSD20に切れ、北は調査区外に延びる。調査段階では溝としたが、土坑の可能性もある。最下層から出土した弥生土器の壺（図16-8）を図示した。遺物の大半は細片で、器表が脱落したものが多い。

SD57（図14）は15区で検出した溝で、埋土・規模等が共通することから20区のSD62と一連の遺構と推測できる。SD62を含む延長は約22mで、幅1.1m、深さ96cmを測る。溝の肩は角度をもって掘り込まれる。溝の下層は自然に埋没し、上層は人為的に埋められたと考えられる。埋土中からは弥生土器の細片が出土している。

SK2（図15）は6区の下層確認トレンチで検出した土坑である。最下層は地山ブロックを多く含み人為的に埋め戻されているが、上層は自然埋没と考えられる。埋土中から弥生土器の壺（図16-1-1、2）が出土した。

SK25（図15）は2区で検出した。SK2の西約30mに位置する平面楕円形の土坑である。埋土は2層に分かれ、上層に径10cmほどの円礫を複数含み、土坑の窪みに破棄されたと思われる。下層から壺（図16-2）など弥生土器6点が出土した。

SK29 (図15) は4区で検出した。SK25の東約13mに位置する平面楕円形の土坑である。埋土は3層に分層でき、中層に地山のブロックが含まれることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。中層の側面際から激しく摩耗し、投棄された状態で鉢・甕・壺 (図16-3、4、5、6) を含め弥生土器8点が出土した。

SK45 (図15) は8区で検出した。SK2の北西9mに位置する平面円形の土坑である。埋土は2層に分層でき、上層の土坑中央部で約10cmの円環と弥生土器片73点が出土した。底面付近で弥生土器の広口壺 (図16-7) が出土した。

(2) 古墳時代の遺構

SD77 (図14) は25区で検出した北西から南東へ延びる溝である。溝の規模は幅54cm、深さ26cmを測る。湾曲しながら北西に延びると考えられ、その延長線上に29区SD72、33区SD85、38区SD101が位置する。SD101の延長は図7に示す第1次調査SD01・SD02に接続する可能性が高い。SD101は後述のSD94に切られている。これらの溝の幅はやや異なるものの深さは共通し、一連の遺構となる可能性が高い。その場合、第1次調査を含めた総延長は約90mとなる。性格は判然としませんが、水路ではなく、集落内の区画施設の可能性を考えておきたい。遺物はSD77上層から古墳時代中期の韓式系軟質土器の甎、鉢 (図16-9、11)、SD101から長胴甕と考えられる韓式系土器 (図16-12) が出土した。

SD95 (図14) は38区で検出した北西から南東へ延びる溝である。溝の規模は幅72cm、深さ9.5cmを測る。遺物は出土しなかったが、埋土はSD101と共通している。SD95の延長はSD77と同様、第1次調査SD01・SD02に接続する可能性が高い。その場合、検出部の総延長は約50mとなる。

(3) 平安時代以降の遺構

SB1 (図12) は44区南北トレンチ北部で検出した掘立柱建物跡である。検出状況から2間×3間以上の東西棟の総柱建物跡と考えられる。SP153とSP168を基準とした主軸方向はN12°Eで、検出した平面規模は梁行2間で2.2m、桁行3間で6.7mを測る。遺物はSP168から土師器皿 (図17-23) が、SP289から土錘 (図17-30) 等が出土した他、弥生土器、土師器、陶器等が出土した。

SB2 (図13) はSB1と平面的に重なる位置で検出した掘立柱建物跡である。検出状況から1間×4間以上の東西棟の建物跡と考えられる。平面プランはSB1より一回り小さい。柱穴の直接の切り合いはなく、建物跡の新旧関係は不明である。SP150とSP170を基準とした主軸方向はN14°Eである。平面規模は梁行1間で3.3m、桁行4間で10.1mを測る。遺物はSP170から須恵器椀 (図17-24)、土錘 (図17-25) が出土したほか、弥生土器の細片、土師器、粘土塊等が出土した。

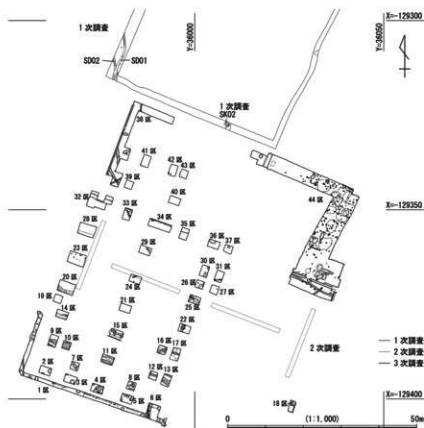


図7 調査区全体図

SB3 (図13) はSB1の南約4mで検出した掘立柱建物跡である。検出状況から2間×3間以上の南北棟の総柱建物跡と考えられる。SP191とSP230を基準とした主軸方向はN23°Eで、飾磨郡条里(N21°E)とほぼ一致している。検出した平面規模は梁行2間で4.6m、桁行3間で6.0mを測る。遺物はSP194から白磁碗(図17-26)と土師器が出土したほか、弥生土器の細片、須恵器、土師器等が出土した。

SB4 (図13) はSB3の南約21mで検出した掘立柱建物跡である。検出状況から1間×3間以上の東西棟の建物跡と考えられ、SP113とSP267を基準とした主軸方向はN31°Eで、検出した平面規模は梁行1間で3.9m、桁行3間で3.8mを測る。柱穴から遺物は出土しなかった。

SD85 (図14) は調査区西部にあたる32～35区で検出した東西方向に延びる溝で、延長約29m、深さ11cmを測る。SK86、SD87に切られる。埋土は上下2層に分かれ、溝底から須恵器瓶(図17-14)と土師器等が出土した。

SD94(図14)は38区で検出した北東から南西へ延びる溝である。延長約3m、幅40cm、深さ15cmを測る。SD101を切る。埋土は砂が多く混じり、炭化物を含む。溝底部からは礫がまとまって出土した。図示していないが、土師器2点が出土した。

SK151 (図15) は44区東西トレンチ東部北側で検出した平面円形の土坑である。埋土内は炭化物を多量に含み、回転糸切りの土師器碗(図17-19)と平高台碗(図17-20)が出土している。

SK302 (図15) は44区南北トレンチ北部で検出した平面円形の土坑である。断面は断側面上部がやや内側に膨らみ、オーバーハングしている。埋土は炭化物を多く含み、土師器皿(図17-31)や土師器鉢(図17-32)が出土した。

SP141 (図14) は44区東西トレンチ東部で検出した、円形の柱穴である。底面から須恵器容器1点(図17-17)、埋土上層で直立気味の状態で鉄鏝1点(図17-18)が出土した。須恵器容器は後述するように経塚等で出土していることから、本遺構も祭祀的な性格のものの可能性がある。検出位置がSB1・SB2と平面的に重なることから、これらの建物遺構と関連していると考えられる。

SP199 (図14) は44区南北トレンチ中央部で検出した、円形の柱穴である。調査範囲内においては、建物を構成するものではないが、掘方内から須恵器壺(図17-27)が正位に据えられた状態で出土した。上部は扁平な石で蓋をしていた。壺内には土砂が半分ほど流入しており、篩にかけたが遺物等は確認できなかった。掘方は須恵器壺より一回り大きい規模であることから、当初から須恵器を埋納するために掘られたものと考えられる。近接してSB3とSB4があるが、これらとの関連は不明である。

(4) SX400～408

調査区東部の44区で時期・性格不明の遺構(SX400～408)を9基検出した。SX401、407を除きやや不整な方形状の平面を呈す。SX401とSX407は南北に長い楕円形を呈している。平面規模は直径3m程度で、検出段階では基盤層に類似した礫混じりシルトの土坑(以下、白色土坑)を黑色シルトの土坑(黑色土坑)が切り込むような状況であった。

いずれも深さ1m程度で、黑色土坑の断面はU字状を呈し、白色土坑の底面まで掘り込まれるものやや浅いものがある。白色土坑は一方を垂直に掘り、その反対側は緩やかに掘り込んでいる。断面から白色土坑と黑色土坑は切り合うことが確認でき、白色土坑埋設後に黑色土坑を掘り込んでいる。この様相は全ての遺構で共通している。

白色土坑の底面は不整形で凸凹が顕著である。遺物は遺構検出時に弥生土器が出土したが、埋土中からは全く出土していないため、時期は不明である。遺構上面から中世の柱穴群が掘り込まれることから、それ以前の遺構であることは確実である。一見、風倒木の痕跡のようにも見えるが、明らかに白色土坑と黑色土坑は切り合っており、人為的なものであることは間違いない。管見の範囲で類似する遺構はなく、今後の検討が必要である。

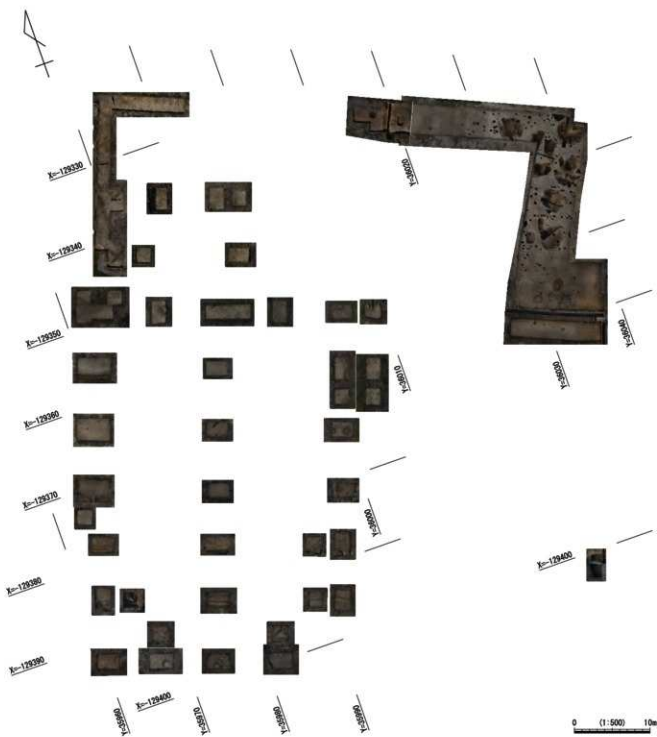


图8 調査区全体図

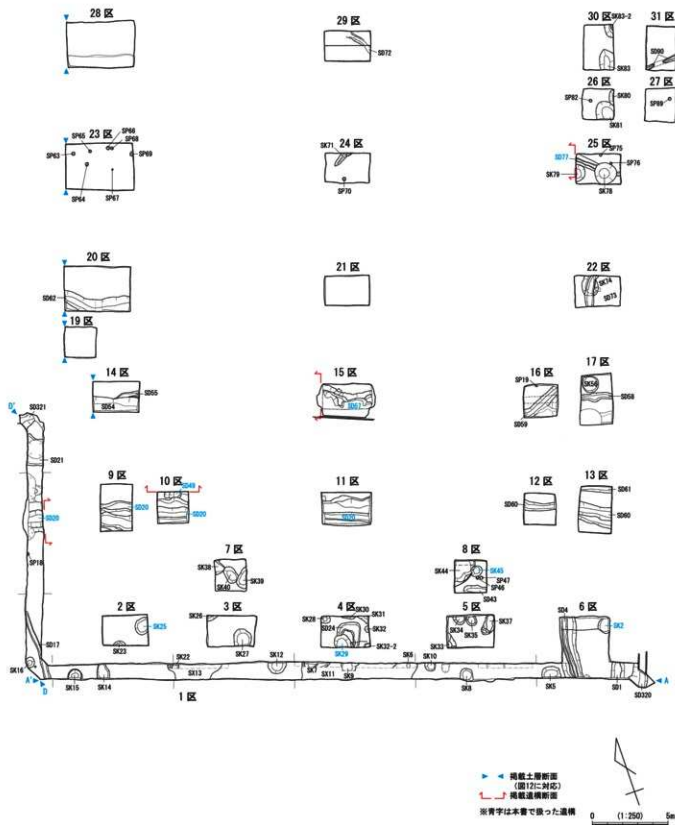


図9 南側調査区 平面図

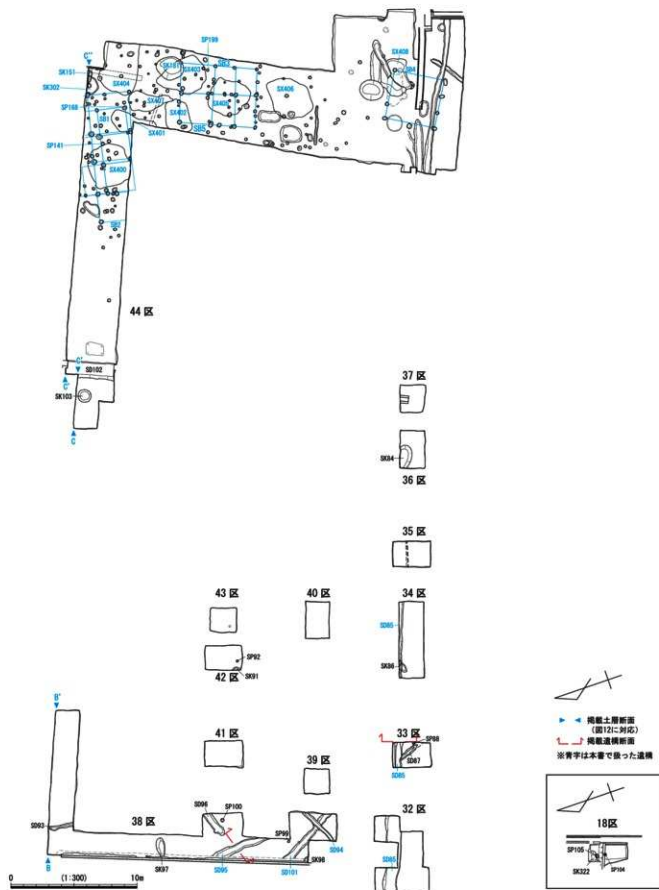
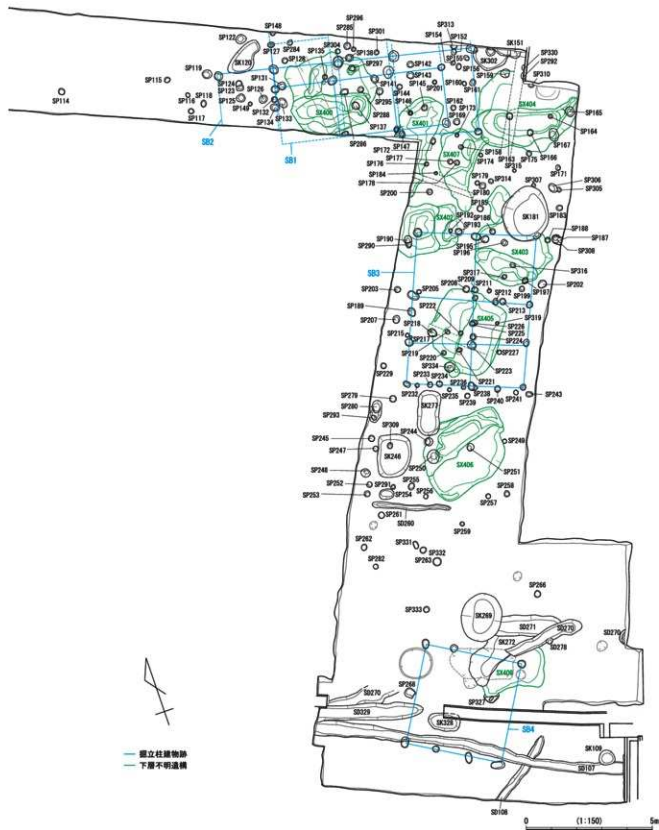
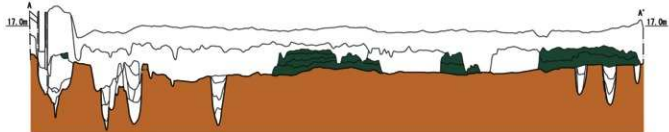


図10 北側調査区 平面図



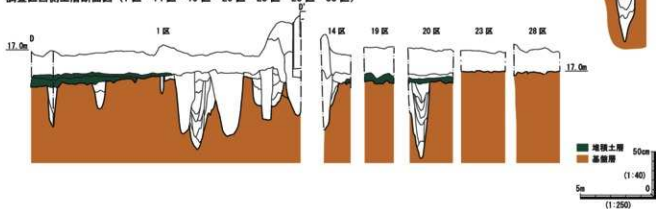
調查区南側土層断面圖 (1 区)



調查区北側土層断面圖 (38 区・44 区)



調查区西側土層断面圖 (1 区・14 区・19 区・20 区・23 区・28 区・38 区)



S81

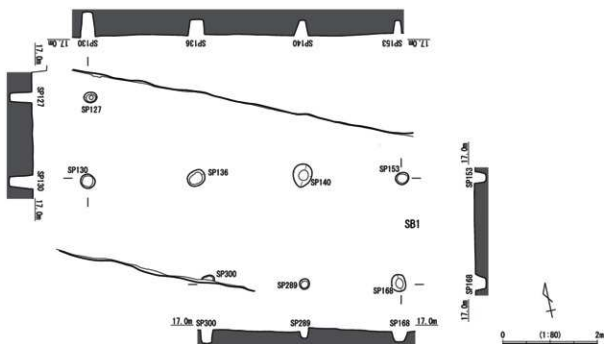
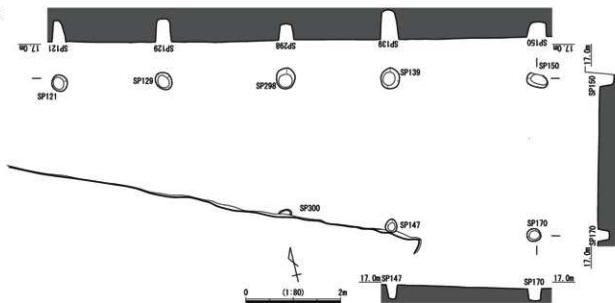
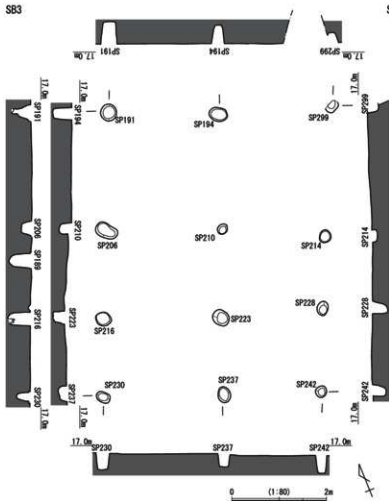


圖12 調查区土層断面圖、S81 平断面圖

SB2



SB3



SB4

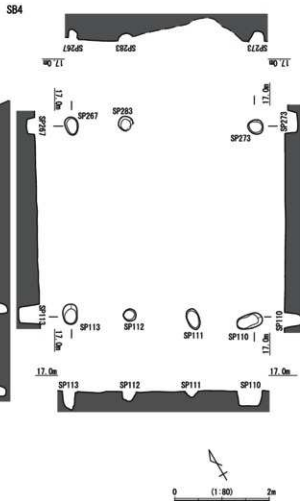
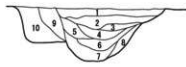


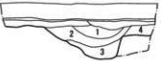
图13 SB2·SB3·SB4 平面剖面图

SD20

N
17.0m

1. 2. 5Y5/1 黄灰色細～中砂混じりシルト
2. 2. 5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルト
3. 7. 5Y7/1 灰白色中～粗細砂シルト
4. 7. 5Y5/1 灰白色細砂～中砂シルト
5. 10YR4/1 褐灰色中～粗砂混じりシルト φ0.5cm大礫含む
6. 10YR2/1 黒褐色粘土 炭化物含む
7. 5YR4/1 褐灰色粘土 炭化物含む
8. 10YR5/1 褐灰色細砂混じりシルト 地山ブロック含む
9. 7. 5Y6/1 黄灰色細～中砂混じりシルト
10. 7. 5Y6/1 灰白色細砂混じりシルト φ0.3cm大礫含む

SD49

S
17.0mN
17.0mE
17.0m

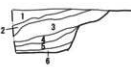
1. 2. 5Y4/1 黄灰色中～粗砂混じりシルト
2. 2. 5Y5/1 黄灰色シルト～粘土
3. 2. 5Y5/1 黄灰色中砂混じりシルト
4. 10YR6/3 に富み黄褐色細砂混じりシルト

SD77

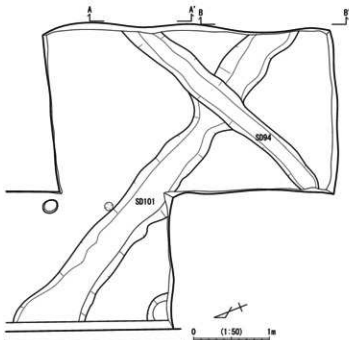
W
17.0mE
17.0m

1. 10YR5/1 褐灰色細砂混じりシルト
2. 10YR2/1 黒褐色シルト～粘土

SD57

S
17.0mN
17.0m

1. 2. 5Y5/1 黄灰色細～中砂混じりシルト
2. 2. 5Y4/1 黄灰色中～粗砂混じりシルト
3. 10YR5/1 褐灰色中砂混じりシルト 地山ブロック含む
4. 2. 5Y4/1 黄灰色細砂混じりシルト
5. 10Y5/1 灰白色細砂混じりシルト
6. 7. 5Y7/1 灰白色中～粗砂 (澗水による堆積)

0 1m
(1:50)

SD85

N
17.0mS
17.0m

1. 10YR6/1 褐灰色中～粗砂混じりシルト
2. 10YR6/1 褐灰色細砂混じりシルト

SD94

A
17.0mA'
17.0m

1. 10YR5/1 黒褐色中砂混じりシルト 炭化物含む φ25cm大礫含む

SD95

W
17.2mE
17.2m

1. 2. 5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルト

SD101

B
17.0mB'
17.0m

1. 10YR3/1 黒褐色中～中砂混じりシルト
2. 10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルト

※SD20・SD57・SD49・SD77・SD85・SD95の断面位置は図9、10に対応
0 1m
(1:50)

SP141

A
17.0mA'
17.0mA
17.0m

1. 10YR4/1 褐灰色中～粗砂混じりシルト 4cm大礫含む
2. 10YR5/1 灰白色細砂混じりシルト

SP168

A
17.0mA'
17.0mA
17.0m

1. 2. 5Y5/1 黄灰色細砂混じりシルト 炭化物少量、地山ブロック多く混じる
2. 2. 5Y5/1 黄灰色細砂混じりシルト

SP199

A
17.0mA'
17.0mA
17.0m

1. 2. 5Y4/1 黄灰色細～中砂混じりシルト
2. 2. 5Y5/1 黄灰色細砂混じりシルト

0 50cm
(1:20)

図14 SD20・SD49・SD57・SD77・SD85・SD95 断面図 SD94・SD101・SP141・SP168・SP199 平・断面図

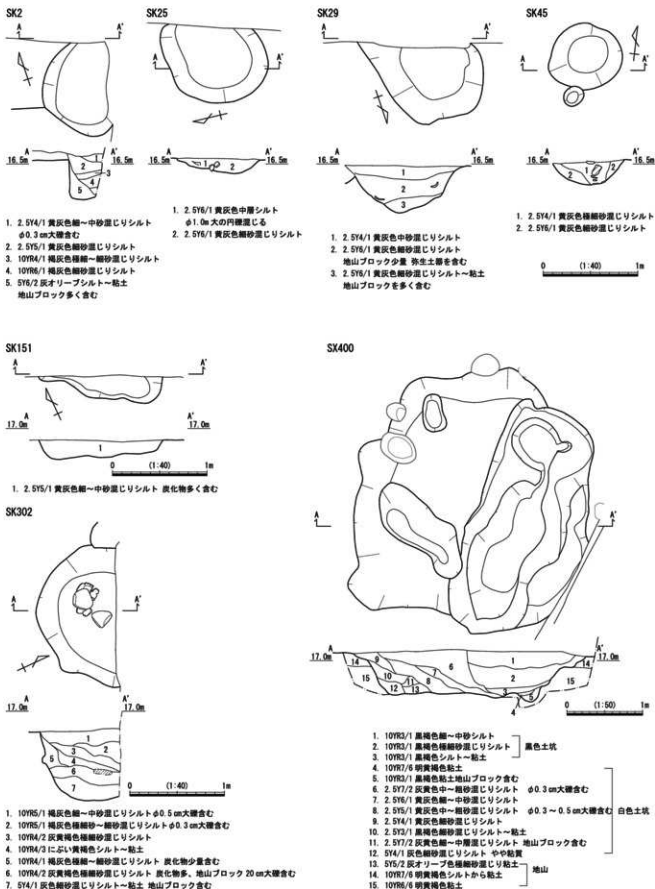


図15 SK2・SK25・SK29・SK45・SK151・SK302・SX400 平面断面図

表1：小幡方造跡第3号発掘調査検出遺構一覧(1)

調査区	遺構名	調査区における位置	発掘状況(検出)		出土品および遺物出土状況	特記事項
			検出 位置	検出 状況		
1区	SD1	東端で検出。南北方向の溝で、北西側の水路SD20より埋積土が埋積不明。東端は埋積土の減少から、埋積土が減少している。	(172)	—	(5)6	中層の土盛り。
6区	SK2	北西方向の溝で、埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(104)	(3)6	48	層下埋積土が減少している。自然発現。層下埋積土から出土した遺物は、56出土。
1-6区	SD4	南北方向の溝。東端は層下埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	170 下層 18	—	68	層下埋積土が減少している。中層に埋積がある。
	SK5	東端、SD4の溝で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	130	—	66	レンズ状に埋積。埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK6	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(73)6	—	(3)7	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK7	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(190)	—	(5)6	東端は埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK8	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	106	—	57	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK9	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(192)	—	(2)8	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK10	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(68)	—	(2)8	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK11	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(84)	—	(1)5	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
1区	SK12	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	118	70	49.5	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK13	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(34)	—	(1)5	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK14	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(88)6	85.4	30	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK15	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	96	—	40	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK16	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	68	—	42	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SD17	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	上層 24 下層 12	—	14	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SP18	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	22	—	18	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
16区	SD19	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(16)	(8)	5	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
1区、9-11区	SP20	1区、9-11区に北側を埋積。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	上層 20.5 下層 30	—	68	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
1区	SD21	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	上層 24 下層 18	—	34	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK22	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(84)	—	(2)4	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK23	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(82)	(20)	19.3	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
4区	SD24	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	75.2	51.4	10.4	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
2区	SK25	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	120	(88)	30.7	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
3区	SK26	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(34.9)	(67.9)	12.5	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK27	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(113)	118.6	52	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK28	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(82)	(64.1)	40	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK29	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(107)	78.1	50.4	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
4区	SK30	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(110)	(19.3)	26	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK31	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	88.4	(37.8)	45	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK32	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(52)	(27.2)	26	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK33	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(40)	(22)	22	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK34	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(84)	(50.5)	51	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
5区	SK35	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(61.6)	67.7	17	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK36	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(130)	(76.3)	10	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK37	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(94)	(67.7)	23	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
7区	SK39	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	136.8	(66.1)	32.4	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK40	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	114.1	71.2	26	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SD43	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	上層 47.2 下層 27.7	—	14	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
8区	SK44	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(136)	(128.9)	62	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK45	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	76	(60.7)	23	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SK46	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	20.6	—	0.08	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SP47	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	21.6	—	23.5	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
10区	SD49	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	112	—	42	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SD54	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	(58)	—	(9.5)	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SD55	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	32	—	(9.5)	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
	SD56	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	98	—	38	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
14区	SD59	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	上層 105 下層 124	—	96	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
19区	SD58	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	上層 24 下層 12	—	14	埋積土が減少している。埋積土が減少している。
18区	SD59	東端で検出。東端は埋積土が減少している。東端は埋積土が減少している。	上層 73 下層 28.5	—	52	埋積土が減少している。埋積土が減少している。

表3：小幡方遺跡第3次発掘調査検出遺構一覧(3)

調査区	遺構名	調査区における位置	検出状況		埋土および遺構土状況	特記事項
			検出 層位 (m)	検出 層位 (m)		
44区	SO107	南北トレンチ(以下)埋没で検出。遺構西側の溝で、断面はほぼ、S107Bを参照。SK109-S111に跨る。	上層 埋 43	—	8	埋没。遺構北側一半砕岩シフト。平坦地での遺構と類似。埋土から調査結果が出た。
	SO108	南側で検出。北東から南西方向の溝で、断面はほぼ、SO107Bに似る。	上層 埋 37 27	—	7	埋没。埋没色相一半砕岩シフト。
	SK109	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	62	—	14	埋没。埋没シフト。柱土。埋土の厚さ少ない。
	SK110	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	55	37	37	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP111	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	44	29	12	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP112	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	26	—	18	柱状あり。埋没色相埋没シフト。
	SP113	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	42	29	38	柱状あり。埋没色相埋没シフト。
	SP114	南北トレンチ(以下)埋没で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	22	—	18	埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP115	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	26	—	12	埋没。埋没色相埋没シフト。掘削ブロック存在。
	SP116	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	21	—	14	埋没。埋没色相埋没シフト。
	SP119	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	22	—	27	埋没。埋没色相埋没シフト。掘削ブロック存在。埋土の厚さ少ない。
	SK118	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	29	22	20	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SK119	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	35	—	25	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SK120	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	165	86	18	埋没色相。埋土の厚さ少ない。
	SP121	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	36	—	43	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP122	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	42	37	13	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP123	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	30	24	23	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP124	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	121	—	13	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP125	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	36	—	18	埋没シフト。埋土の厚さ少ない。下に掘削ブロック存在。
	SP126	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	35	29	28	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP127	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	28	22	28	柱状あり。埋没シフト。掘削ブロック存在。埋土の厚さ少ない。
	SP128	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	23	—	37	埋没。埋没色相埋没シフト。
	SP129	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	40	33	44	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。
	SP130	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	30	—	40	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。
	SP131	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	31	—	26	柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。
	SP132	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	23	—	16	上層に埋没色相。上層に埋没色相。下に埋没色相。掘削ブロック存在。
SP133	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	43	31	34	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP134	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	37	29	10	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP135	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	19	—	26	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP136	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	29	33	35	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP137	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	34	28	43	柱状あり。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP138	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	28	—	18	柱状あり。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。掘削ブロック存在。	
SP139	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	43	—	41	柱状あり。埋没シフト。掘削ブロック存在。柱土の不揃い。	
SP140	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	49	40	46	埋没色相。埋没シフト。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。埋没シフト。	
SP141	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	29	—	12	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP142	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	24	—	27	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。掘削ブロック存在。	
SP143	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	29	—	30	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP144	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	23	—	13	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP145	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	25	—	48	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP146	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	19	—	13	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP147	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	26	—	24	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP148	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	22(2)	—	24	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP149	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	19	—	11	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP150	南北トレンチ(以下)埋没で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	48	28(8)	26	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SK151	南北トレンチ(以下)埋没で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	131	26(5)	20	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP152	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	25	19	28	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP153	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	25	—	28	埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP154	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	18	—	37	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP155	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	23	18	47	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP156	南北トレンチ(以下)埋没で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	26	20	17	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP159	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	18	—	18	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP159a	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	44	—	27	柱状あり。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP160	南側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	17	—	16	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP161	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	28	23	31	柱土。埋没色相。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP162	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	21	—	14	埋没。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。	
SP163	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	25	—	19	埋没色相。埋土の厚さ少ない。掘削ブロック存在。土層不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP164	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	16	—	23	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP165	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	39	36	16	柱状あり。埋没シフト。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。	
SP166	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	27	—	27	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP167	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	33	36	14	柱状あり。埋没シフト。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP168	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	36	30	23	柱状あり。埋没シフト。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。	
SP169	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	21	—	18	埋没色相。埋土の厚さ少ない。下に掘削ブロック存在。掘削ブロック存在。土層不揃い。	
SP170	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	13	—	24	柱状あり。埋没シフト。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP171	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	18	—	23	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。	
SP172	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	27	20	10	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP173	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	16	—	9	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP174	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	18	—	22	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。埋没色相。埋没シフト。	
SP175	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	23	—	23	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP176	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	18	—	14	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP177	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	20	—	14	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP178	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	21	—	19	柱状あり。埋没シフト。埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SP179	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	19	—	10	埋没。埋没色相埋没シフト。	
SP180	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	26	—	25	埋没。埋没色相埋没シフト。埋土の厚さ少ない。柱土不揃い。	
SK181	北側で検出。断面はほぼ同形。断面はほぼ、SO107Bを参照。	219	158	68	埋没色相。埋土の厚さ少ない。土層不揃い。埋没色相。埋没シフト。	

第3節 遺物

調査では弥生時代後期から鎌倉時代の遺物が出土した。調査区全体でコンテナ (L590mm×W386mm×H106mm) 換算で14箱である。その中で、実測可能であった遺物33点を掲載した(図16、17)。1～8は弥生時代後期、9～13は古墳時代中期、14～33は平安時代以降の遺構から出土した遺物である。

弥生時代

1-1・2はSK2出土の壺である。両者は接合しないものの、器形や胎土等の特徴から同一個体の可能性が高い。1-1は胴部下半で、外面には主に縦方向のミガキを施す。1-2は底部で、底面には接合部と思われる痕跡がみえる。2はSK25出土の長頸壺で、肩部には右下がりの刺突文を施す。3～6はSK29から出土した。3は鉢で、器壁が粗く内外面とも調整は不明である。4は甕の底部である。器壁が剥落しており、調整は不明である。5は短頸壺で、口縁部外面に僅かにハケメが残る。内面は肩部以下に左上がりの粘土紐の接合痕が比較的明瞭にみえる。それより上部については外面調整に伴うオサエが顕著である。6は壺である。外面は器壁が粗いため、調整は不明である。内面には左上がり方向のケズリが微細に残る。7はSK45出土の広口壺で、大きく広がる口縁部端面に2条の擬凹線を施す。8はSD49出土の甕である。口縁部は僅かに外反する。外面に黒斑がある。

古墳時代

9～11はSD77上層から出土した。9・11は韓式系土器である。9は平底鉢で、外面には僅かに縄文がみえる。11は甕もしくは鍋の胴部である。外面には縄文が微細に残り、それに対応する内面には無文当て具によるものと思われる凹部が比較的顕著である。10は土師器の高杯である。12はSD101出土の韓式系土器の長胴甕である。肩部外面には正格子状のタタキがみえる。13は25区の韓式系土器の甕で、原位置から遊離した状態で出土した。把手は外面側から挿入されており、それに伴う痕跡が僅かに観察できる。器壁は粗いが、縄文と思われる痕跡が微細に残る。あくまで肉眼観察にとどまるが、在地系土師器である10と外来系要素を有する9・11～13では胎土の色調や鉱物粒に相違点が看取できる。

平安時代以降

14はSD85出土の須恵器瓶の底部である。高台は貼り付け輪高台で歪みが見られる。15はSP100出土の須恵器碗である。底部は回転糸切りで、口縁部に重ね焼きの痕跡が見受けられる。16はSP126出土の須恵器碗で、底部は回転糸切りである。17・18はともにSP141から出土した。17は底面から出土した須恵器の容器である。上方から見ると「日」の字状の形状をしている。外面は粗いケズリで成形し、底部はナデで成形している。内部はナデを施したのちに、細部をヘラケズリで調整している。同様の形態を持つ製品の出土事例としては、甲山経塚(姫路市飾磨区妻鹿)で出土した土製品や宝林寺北遺跡(たつの市)で出土した石製品がある(参考文献4、5)。18は上層で直立気味に出土した鉄鍔である。19・20はSK151から出土した。19は底部回転糸切りの土師器碗である。20は底部回転糸切りの土師器平高台碗である。21・22はSP163から出土した。21は土師器托皿である。底部は回転ケズリで、底部から上部に向けての穿孔が見られる。22は底部回転糸切りの須恵器碗である。23はSP168出土の土師器皿である。底部は回転ヘラ切りで、中央部がやや盛り上がる。24・25はSP170から出土した。24は須恵器碗である。口縁が玉縁状となり、内外面の所々に自然軸が付着する。25は土師器の管状土鍾である。重量は5.5gを量る。26はSP194出土の白磁碗である。部分旋軸で、高台は輪高台となる。27はSP199出土の須恵器壺である。口縁はL字状の受け口となり、底部は回転ヘラ削りの後にナデで仕上げている。28はSP207出土の土師器碗である。いわゆる播丹型で、口縁部は玉縁状で体部に平行タタキが残る。29はSP252出土の須恵器鉢である。30はSP289から出土した瓦質の管状土鍾である。重量は3.7gを量る。31・32はSK302から出土した。31は底部ヘラ切りの土師器皿、32は土師器鉢で内・外面とも摩耗・剥離が激しい。33は44区出土の須恵器碗で、原位置から遊離した状態で出土した。底部は回転糸切りで、口縁に重ね焼きの痕跡が見受けられる。体部に1条の沈線が廻る。

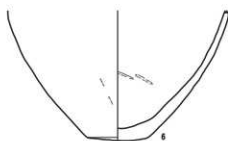
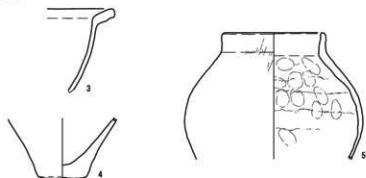
6区 SK2



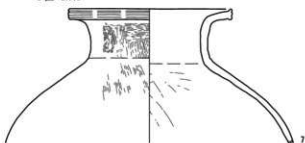
2区 SK25



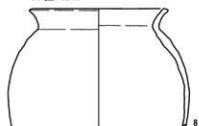
4区 SK29



8区 SK45



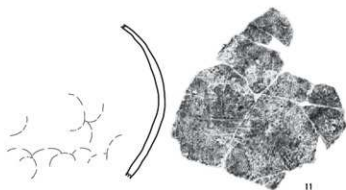
10区 SD49



25区 SD77



38区 SD94-101 重複部



25区 機械面附

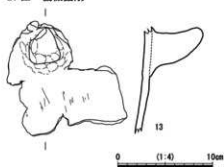


图16 3次調査遺物実測図

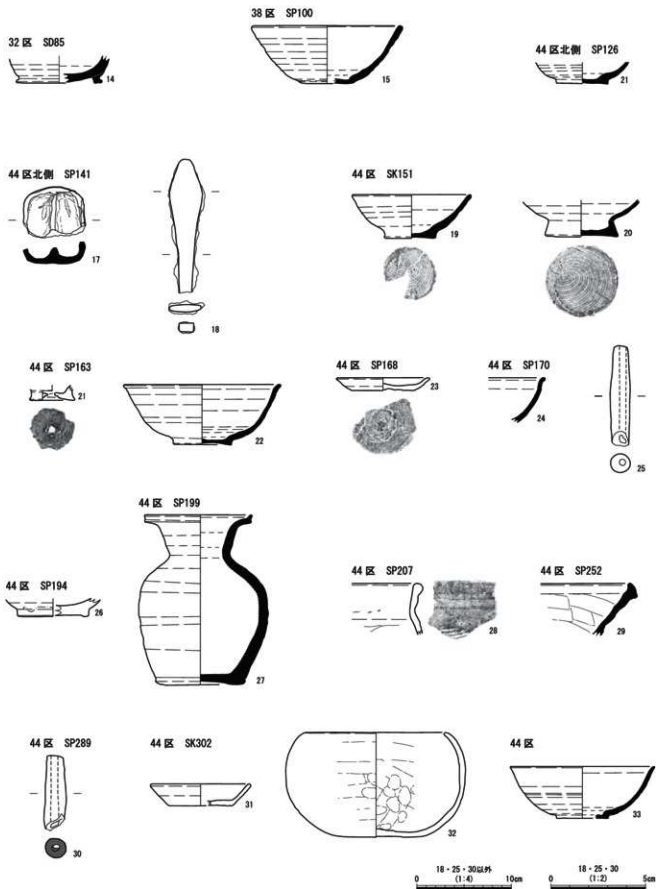


图17 3次調査遺物実測図

第四章 総括

弥生時代

調査区南部で溝SD20、SD57、土坑SK2、SK25、SK29、SK45をまとめて確認した。いずれも弥生時代後期に位置づけられる。SD20、SD57の延長部は調査区の制約から明らかでないが、SD20は比較的大型の溝である。SD20以北では、当該時期の遺構は確認できず、溝以南において土坑が検出できることから、本遺構は区画溝の可能性はある。市川左岸の段丘上において、現在知られている弥生時代の遺跡は国分寺台地遺跡のみであったが、今回の調査により弥生時代の当該地域の集落域を考える上での比較資料を追加することができた。

古墳時代

第1次調査からつながる可能性のある溝（SD77～SD101）を検出した。SD77からは古墳時代中期の韓式系土器の甗や鉢が出土し、既存調査の成果を迫認するものとなった。溝は段丘に沿うように北西から南東へと確認できる。溝の内側では第1次調査のSK02が検出され、溝以南では古墳時代の遺構が見つかっていないことから、この溝が区画遺構である可能性が高い。調査地周辺では、国分寺台地遺跡で韓式系土器・初期須恵器等の出土例があり、南方2kmには渡来系文物が豊富に出土した宮山古墳が所在する（参考文献6・7・8）。市川右岸では渡来系集団の集落跡が確認された市之郷遺跡の実態が明らかになりつつある（参考文献9）。今回の調査成果は、市川をはさま渡来系集団の広がりを知るうえで重要な成果といえる。

平安時代以降

調査区北東部を中心に多数の柱穴および溝、土坑を確認した。平安時代後半から鎌倉時代にかけてほぼ同一地点で掘立柱建物等而建て替えながら、集落が営まれていたことが判明した。なお、今回の調査では4棟の掘立柱建物を検出したが、SB3を除き飾磨郡の条里地割と合わない。当該時期の集落跡は市内の豆田遺跡で実態の把握が進んでおり、条里地割内においては、基本的に建物跡は条里地割に沿って建てられるが、ずれるものも一定程度存在することが確認されている（参考文献10）。このズレは単純に時期差に起因するものではなく、小幡方遺跡における建物方位も条里地割内におけるズレなのか、地形に影響されたズレなのかは不明である。その要因については、今後、周辺の調査の進展を待って明らかにしていく必要がある。また、SP141からは妻鹿経塚出土品と類似する遺物が、SP199からは壺を埋納する出土状況が確認できた。直接的に祭祀の様相を示すものではないが、特徴的な事例といえる。

以上のように、今回の調査によって弥生時代から中世にかけての集落域に関する新たな知見を多数得ることができた。調査地周辺は平成20年（2008年）の小幡方遺跡発見まで遺跡の空白地帯であったが、壇場山古墳や宮山古墳と前後する時期の集落様相が判明したことは重要な成果といえる。一方、44区で検出した時期・性格不明遺構に関しては、今後の課題としたい。

(参考文献)

- 1 姫路市埋蔵文化財センター 2009 『春季企画展「発掘調査速報展2009」』
- 2 田中清美 2006 「初期須恵器生産の開始年代 一年輪年代から導き出された初期須恵器の実年代―Ⅰ」『韓式系土器研究』IX、韓式系土器研究会
- 3 白石純・福井優・山田清朝 2012 「姫路市市之郷遺跡出土韓式系土器の胎土分析」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第5号、兵庫県立考古博物館
- 4 御旅山13号墳発掘調査団 1995 『御旅山13号墳』、姫路市教育委員会
- 5 兵庫県教育委員会 2002 『兵庫県文化財調査報告第223冊 龍野市宝林寺北遺跡Ⅱ』
- 6 姫路市教育委員会 1970 『宮山古墳発掘調査概報』
- 7 姫路市教育委員会 1972 『宮山古墳第2次発掘調査概報』
- 8 姫路市教育委員会 2016 『国指定重要文化財 宮山古墳出土品』
- 9 姫路市教育委員会 2021 『姫路市埋蔵文化財センター調査報告第105集 市之郷遺跡』
- 10 姫路市教育委員会 2020 『姫路市埋蔵文化財センター調査報告第87集 豆田遺跡・大浄口遺跡』

写真図版 1



調査地より壇場山古墳を望む（西から）



調査区南部トレンチ全景（西から）



44区 (西から)



44区 (南から)

写真図版 3



1区南壁土層断面図（北から）



19区西壁土層断面（東から）



SD20土層断面（東から）



SD49土層断面（南から）



SD57土層断面（南東から）



SD77遺物出土状況（東から）



SD85土層断面（西から）



SD94-101検出状況（南東から）



SK25 (西から)



SK29 (北西から)



SK45土層断面 (南から)



SK151遺物出土状況 (南から)



SK302遺物出土状況 (南西から)



SP141遺物出土状況 (北西から)



SP141遺物出土状況 (南西から)



SP168遺物出土状況 (東から)



44区土坑群完備状況（南西から）



SP199遺物出土状況（北から）



44区北側柱穴遺構群完備状況（西から）



SX400土層断面（南西から）



SX400（南西から）



SD77 9



SD77 11



SD94-101 12



SP141 17



SP199 27



SK302 32



SP141 18

報告書抄録

ふりがな	こぶかたいせき							
書名	小婦方遺跡							
副書名	第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第118集							
編著者名	河本愛輝、中川猛							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和4年(2022年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小婦方遺跡	兵庫県姫路市 花田町加納原田 字小婦方	28201	020936	34° 50′ 01″	134° 43′ 37″	2020.6.25 ～ 2020.10.3	699㎡	店舗 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号	
小婦方遺跡	集落跡	弥生、古墳、 平安、鎌倉時代	溝、土坑、 掘立柱建物跡、柱穴		弥生土器・須恵器・ 土師器・磁器・瓦・鉄鏝		20200115	
要約	第1次調査では、古墳時代中期の韓式系土器がまとめて出土していたが、今回の調査では、それより時期のさかのぼる弥生時代後期の溝と土坑が見つかった。また、調査区の東部では平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物跡等を検出し、弥生時代から中世にかけての集落域に関する新たな知見を多数得ることができた。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第118集

小婦方遺跡

—第3次発掘調査報告書—

令和4年(2022年)3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079)252-3950

発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社 デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57-2